

「先生はどのような幼少期を過ごされたのですか？」

●エンジニアさんからの質問

最近、西田先生のファンになりました。ファンになって、最初に行ったことは、ウィキペディアで先生の人となり調べたことです。そこで、もっとも気になったのが経歴の冒頭の部分です。『父は、後に京都府議会議員、参議院議員を務めた西田吉宏。吉宏が養鶏場の経営に携わっていた少年期は、商品価値の無い鶏肉・卵に麦ご飯、料亭から調達してきた飼料用の魚のアラを食べて育った。西田は後に「それでも不思議に、貧しいという思いはありませんでした」と回想している。幼い頃はアメリカナイズされた戦後世代の一般的な日本人と同様に、アメリカに対する憧れが非常に強かった。』そこで、質問です。先生はどのような少年時代を過ごされたのでしょうか？また、自身の人格形成という点でもっとも大きかった時期とその出来事を差支えなければ教えてください。

●西田昌司の答え

上のウィキペディアのソースは、私の2冊目の著書である「政論Ⅱ」の中の「父 西田吉宏を語る」という文章です (<http://showyou.jp/showyou/detail.html?id=218>)。私の父は昭和9年生まれで、平成19年の参議院選挙が終わった直後に亡くなり、今年七回忌を迎えます。父は若くして結婚し、父が24歳の時に私が生まれました。私の家は父や祖父、またさらに先祖に遡って、ずっと養鶏業を営んでいました。昔、養鶏業者は「とりやさん」と呼ばれ、現金商売でなかなか景気が良かったようです。父は洛陽工業高校の電気科に入学してエンジニアを夢見るのですが、祖父が老人性結核で寝込んでしまい、授業料が払えなくなりました。長男であった父は、二年の途中で中退して養鶏業を継いで一家の大黒柱として働き、二十代半ばで三つの養鶏場を経営する、京都でもひとかどの養鶏家として知られるようになり

ました。

祖父の友人が京都府議会議員をしており、祖父はこの方を手伝っていましたが、この方にはお子さんがいらっしゃいませんでした。この方の後継ぎとして父が周りの人から推されて、父は36歳の時に府議会議員になりました。私はその時、中学一年生くらいでしたが、私は養鶏家の息子からいきなり政治家の息子になってしまい、非常に嫌な思いをしました。政治家の息子はいじめの対象になりがちです。私はいじめられたつもりはありませんが、街に自分の父親のポスターが貼ってあるのは気持ちのよいものではありませんでした。また、テレビドラマではどら息子というと、どこかの県会議員の息子という設定がありがちで、政治家の息子であることが嫌で嫌でたまりませんでした。

このような経緯から「西田吉宏の息子」ではなく「西田昌司」として世間に認めてもらいたい、自立して生計を立てたい、という気持ちが非常に強くありました。父が議員をする頃、父は養鶏業からは身を退いて、父の兄弟が引き継いでいました。私は養鶏業を継ぐ気はありませんでしたし、政治家になるつもりもありませんでした。私の家族は大家族でしたから、勤め人になってもなかなか支えられないので何か資格を取ろう、と思いました。弁護士・会計士・税理士が頭に浮かびましたが、税理士が一番取りやすいだろうと考え、税理士の資格を取って税理士になりました。

平成元年に、父は参議院議員に立候補し当選しました。翌年、父の抜けた後の議席を決める京都府議会議員の補欠選挙がありました。父の後継者は既に決まっていたのですが、選挙が間近になって、その方が家庭の事情で立候補を辞退されました。そのまま候補者が決まらなければ、補欠選挙は不戦敗になってしまいますが、父が空けた穴だけに絶対に許されませんでした。そこで私に白羽の矢が立ち、まさに青天の霹靂のごとく政治の世界に投げ出されました。

私は昭和33年生まれです。東京オリンピックは昭和39年に開かれまし

た。あの当時は貧しい時代ではありましたが、高度経済成長期であり、毎日明るい話題がありました。漫画「三丁目の夕日」は、東京タワーが建てられオープンした昭和33年頃を舞台としており、そこで描かれるような世界が、私が子供の頃の京都にもありました。貧しくても将来に対する希望が満ち満ちていた時代でした。私の世代と比べて、今の若い世代は圧倒的に豊かではあります。しかし、将来に期待できず、希望のない世代でもあります。今の時代の閉塞感を打破して希望を持てる世の中にするには、我々政治家の使命です。

ところで、戦後の教育は欧米の個人主義という価値観に基づいて推進され、戦前の日本の伝統的な価値観は全て封建的なものとして葬ってきました。私が子供の頃は、家族や地域社会のつながりがまだありましたが、そのつながりはどんどんと崩壊しています。個人主義の原理を家庭の中に持ち込めば、家庭が崩壊するのは当然の帰結です。家庭の再生のためには、行き過ぎた個人主義を是正し、戦後に封印されてきた家族主義に代表される伝統的価値観に回帰し、個人主義と家族主義のバランスを上手くとらなければなりません。

私たちは戦前のムラ社会が悪いものだとばかりに捉えています。確かに、行き過ぎた排除の論理、行き過ぎた個の軽視、行き過ぎた先例中心主義といったものを私は肯定しません。しかし、地域への愛着、公益重視、歴史という長い物差しによる大局観や安定性といった価値観は、やはり否定できるものではありません。ムラ社会とは人間の絆を重視する社会であり、横軸には同時代に生きるムラの人々、縦軸には過去から未来に生きるムラの人々との、縦横の絆でつながっています。この絆があまりに強すぎると個の軽視にもなってしまいますが、バランスを上手くとりながら、ムラ社会を回復させることは必要ではないでしょうか。「自由」ばかりを追及しすぎると、家族や地域社会という、本来個人と引き離しては考えられないものをばらばらにし、利己主義に陥ってしまいます。

また、戦後日本は「自由」とともに「豊かさ」を重要な価値観として社会

を築いてきました。経済活動とは私益の追及の延長線上にあるものですが、あまりにも度の過ぎた大量生産・大量消費・大量廃棄が地球環境を破壊する結果を招きました。私益の追及は必ずしも公益にはつながりません。無制限な私益の追及は決して許されるべきではなく、私益と公益が一致するように経済の仕組みをコントロールする必要があります。そのためには、経済的尺度とは異なる別の尺度、何が人間にとって幸せなのかという根本的な価値観を持たなければなりません。その別の尺度とは、それぞれの国によって違うでしょうが、それぞれの国の歴史的な文化や伝統に基づく価値観でありましょう。限度を超えた「豊かさ」の追及は、損か得かという拝金主義を蔓延させ、人間を墮落させてしまいます。

私は、現在ほど「自由と豊かさ」に毒されておらず、のどかで良い時代であった少年の頃の思い出にノスタルジーを感じていますし、そのような社会をもう一度取り戻したいと思います。どの時代の人でもそれぞれのノスタルジーをお持ちでしょうし、子供の時代にはあった良いものが大人になって失われてしまったと感ずることがあるでしょう。それらはもう取り戻せないのかもしれませんが、何とかしてそれらを取り戻して次の世代に伝えたい、と思う心が日本を良くしていく原動力になるのだと思います。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>